

## 母は逝った

夜明けの陽も待たず  
母は逝った

切れ切れになった幸せの数を  
つなぎ合わせるように

笑顔で逝った

あなたの影は 無限の中で  
くりかえしを許さないまま  
笑顔をあたえて逝った

私は あなたに何を返したのだろう  
罪を持つ子として

私はあなたに測り知れない悩みを

永遠にあなたえてしまった

あなたはこれを未知の世界まで

持っていったにちがいない

私はこの苦悩を拭う事も出来ないまま  
あなたを逝かせてしまった

昨日の花が失せていくように

遠く遠くあなたの顔も失せてゆく

今日の朝焼は

炎の中にたたずむ

あなたが包まれている

## 娘と私

いつまでも手のかかる  
あなたでいて欲しかった

私の腕からいつかすり抜け  
一人立ちしようとする娘よ  
思い出を語るのは貧しいかもしれないが  
私は心の片隅にしまっておきたい

真白な砂浜に小さな足あとを残し  
桜貝を一つずつ拾いあつめたあの日

白つめ草の首飾りを無心に作って  
私の首にかけてくれたあの日

燃えるような山道を  
真赤なほっぺのあなたが  
秋の中をかけていった後姿

秋祭りに祭りはんてんを着こんで  
町を練り歩いたあの日  
数々あるアルバムの中には  
幼いあなたがいつも微笑んでいる

娘よ

今二十一歳の青春に  
あなたは何かを賭けようとしている  
いつまでも子供じゃないと  
いつまでも甘ったれじゃないと  
脱皮するあなたに私は  
言葉すらかける事を忘れてしまいそう

娘よ

いつかは嫁ぐ日もあるでしょう  
そんな日が来るのが喜んで迎えられるでしょうか

娘よ

いつまでも子供でいてほしい  
あなたの鈴のついた赤い草履が  
玄関の片隅にぬぎ捨てられた日のように